様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００４３４

研究課題名（和文）田園主義的イングリッシュネスとイギリス小説

研究課題名（英文）Rural Englishness and the English Novel

研究代表者
丹治　愛（TANJI, Ai）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：９０１３３６８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　田園にこそイングランドの本質的ナショナル・アイデンティティがあるという田園主義的イングリッシュネス観念が、いつごろ、どのような歴史的な脈絡のなかで生まれたか、それぞれの時代に他のナショナル・アイデンティティとどのように葛藤し、どのように変容しながら展開してきたかを概観した。
　具体的にあつかうのは、ジェイン・オースティンからカズオ・イシグロにいたる代表的なイギリスの作家の作品であり、それらの作家たちがイングランドの田園の社会と風景をどのように描いたか、それをとおして田園主義的イングリッシュネス観念の構築と脱構築の歴史にどのように関わったかを時系列的に追跡した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、1980年代以降の学際的なナショナル・アイデンティティ研究の成果にもとづき、イギリスの代表的な作家の作品が田園主義的イングリッシュネス観念の構築と脱構築にどのように関わっているかを具体的に解釈することをとおして、英文学研究の立場からそのような研究に独自の貢献をしようとするものである。
　そのようなものとして本研究は、国民国家とほぼ同時に誕生した小説というメディアが国民を統合するナショナル・アイコンを創造することによって国民国家の政治と密接に関わると同時に、いかにそのような政治的機能に批判的でもあったかを跡づけることで、文学と政治との関係を具体的に問うことを意図している。

研究成果の概要（英文）：　I studied when and in what historical contexts the idea of rural Englishness, which holds that the "green and pleasant" countryside is England's essential national identity, emerged, and how it transformed itself in the history of the 19th and 20th centuries, conflicting with other national identities (industrial, imperial, and so on) at different times.
　Concretely speaking, I analysed and interpreted the works of representative English writers, from Jane Austen to Kazuo Ishiguro, focusing on how they depicted English rural society and its landscape, and through this, how they constructed and deconstructed the idea of rural Englishness.

研究分野：イギリス文学、とくに小説

キーワード：国民国家　ナショナル・アイデンティティ　イングリッシュネス　産業革命　田舎と都会　エミリー・ブロンテ　ジョージ・エリオット　カズオ・イシグロ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、イギリスの文学作品（おもに小説）を解釈するイギリス文学研究であると同時に、イングランドのナショナル・アイデンティティ（＝イングリッシュネス）の歴史的変遷を学際的にあつかうイングリッシュネス・スタディーズというカテゴリーに属する研究である。イングリッシュネス・スタディーズは、1980 年代に開始され、1990 年代になると優れた研究書を陸続と生み出しはじめた。とくに優れた著作をあげるだけでも、Gikandi, *Maps of Englishness* (1996); Matless, *Landscape and Englishness* (1998); Baucom, *Out of Place: Englishness, Empire and the Locations of Identity* (1999) ; Corbett, et. al. (eds.), *The Geographies of Englishness* (2002); Kumar, *The Making of English National Identity* (2003); Esty, *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England* (2004) といった、まばゆいばかりのラインナップとなる。

本研究が開始された 2010 年代の後半、イギリス文学研究は、このようなイングリッシュネス・スタディーズの古典的な著作を咀嚼しつつ、文学研究の立場から学際的なイングリッシュネス・スタディーズにどのような貢献ができるか、そこになにを付け加えていけるかをさまざまな観点から模索すべき段階にあった。わたしは、Jane Austen 以降のイギリス小説のいくつかを分析的に解釈することによって、田園にこそイングランドの本質的ナショナル・アイデンティティがあるという田園主義的イングリッシュネスの形成にイギリス小説がどのように関わっていったかを明らかにすることで、自分なりの貢献ができると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の二つに要約される。

(1) 田園にこそイングランドのナショナル・アイデンティティ（イングリッシュネス）の本質があるという田園主義的アイデンティティがどのような政治的・思想的・美学的なコノテーションをもっているか、いつごろ、どのような歴史的な脈絡のなかで生まれ、その他のナショナル・アイデンティティとどのように葛藤しながら、どのように展開してきたかを概観する。

(2) それと同時に、Jane Austen から Emily Bronte、George Eliot、William Morris, Thomas Hardy, George Gissing といったヴィクトリア朝の作家をへて、20 世紀の E. M. Forster、D. H. Lawrence, Virginia Woolf、そして Evelyn Waugh、Kazuo Ishiguro にいたるイギリス小説を田園主義的イングリッシュネス概念の歴史的文脈のなかで文化研究的に読解し、それぞれのイギリス小説がこの概念とどのように関わってきたのかを明らかにする。

３．研究の方法

文学批評の方法としては、文化研究的なアプローチを採用した。文学作品を中心的なテクストとして分析しつつ、ひとつの文学作品を論じる際に、それと同時代のさまざまなジャンルの一次資料（歴史的・思想的・科学的なテクストなど）と学際的に関連付けることによって、その時代の文化的磁場を浮かびあがらせるという方法である。

それと同時に、とくに 18 世紀後半から 20 世紀末にいたる歴史にかんする多くの二次資料も参照した。なかでも、国民国家の形成、風景概念の導入、農業革命・産業革命、選挙法改正、労働者の階級闘争的運動、イングランド農業の衰退、帝国主義をめぐる議論、第一次および第二次世界大戦、戦後の労働党政権、サッチャー政権とそのヘリテージ戦略といった歴史的背景は、本研究を進めるうえでひじょうに重要な意味をもっていたので、それらに関連する二次資料は大いに参照させてもらった。

４．研究成果

わたしは、田園主義的イングリッシュネス概念が構築され、そして脱構築される歴史的プロセスを、Jane Austen, Emily Bronte, George Eliot, William Morris, Thomas Hardy, George Gissing, E. M. Forster, D. H. Lawrence, Virginia Woolf, Evelyn Waugh, Kazuo Ishiguro のそれぞれの作品を、そのときどきのさまざまな歴史的背景のなかで歴史主義的に解釈することをとおして通史的に描くことをめざしているが、最終的にどのようなかたちとなるかを、まずとりあげる作品と主題のリストのかたちで示しておきたい。そのうえで、本研究期間中にどこをどれだけ進捗させたのかを多少詳しく説明するとともに、いまだどのような課題が残っているかを明らかにしておきたいと思う。

(1) ジェイン・オースティン『分別と多感』『高慢と偏見』『マンスフィールド・パーク』『エマ』『ノーサンガー・アビー』『説得』――国民国家、ジェントリー、資本主義、田園風景の発見、風景庭園の発明、カントリー・ハウス、ピクチャレスク美学。

「ジェイン・オースティンの風景論序説　ピクチャレスクからイングランド的風景へ」として発表した論文に加筆することで、ほぼ完成。

(2) エミリー・ブロンテ『嵐が丘』――第一次選挙法改正、資本主義、階級闘争、ジェントリーの勝利、ヨーマンの没落、産業ブルジョワジーの成功。
　本研究期間中に「『嵐が丘』と田園主義的イングリッシュネス　崇高な風景とヨーマンの記憶」を完成。『嵐が丘』をジェントリー階級、ヨーマン階級、産業ブルジョワジー階級の三つ巴の階級闘争を読みこんだテリー・イーグルトンのマルクス主義的な『嵐が丘』解釈に基づき、わたしは、エミリーがこの物語をとおして、イングランドがヨーマンの消失とともになにを失ったか、どのような人間を失ったか、どのような世界観や自然観を失ったか、そして彼女がそのことについてどのように考えていたのか、を表現していると考えた。そのうえでこの物語が、ヨーマンの消失とともに、イングランドのナショナル・アイデンティティが「崇高」性を失い、ジェントリー化していくことにたいするエミリーの悲哀ないし悲憤の表現であると結論づけた。

(3) ジョージ・エリオット『アダム・ビード』『フロス河の水車場』『サイラス・マーナー』という三つの初期作品――第一次第二次選挙法改正、田園風景、国語の確立、国民国家、階級闘争における共感の重要性。
　これについては、現在、執筆中。2022 年の年末に講演の予定。

(4) トマス・ハーディ『テス』とウィリアム・モリス『ユートピアだより』――農業不況、共産主義、第三次選挙法改正、観光文化、ヘリテージ文化。
　「ハーディと田園主義的イングリッシュネス　その概念の構築と脱構築」および「ウィリアム・モリス『ユートピアだより』　ナショナル・ヘリテージとしてのイングランドの田園」として発表した論文に基づき、前者を「トマス・ハーディ『ダーバヴィル家のテス』――社会小説(ソーシヤル・ノヴェル)の完成とヘリテージ文化の出現」（未発表）として大幅に改稿。農業不況により農村の経済的衰退が急速に進むなか、それと反比例するかのように田園がヘリテージとして文化的価値を高めはじめたプロセス、および田園風景のイメージがハーディとそれより下の一群の作家たち（その一人が『ヘンリー・ライクロフトの私記』を書いたジョージ・ギシング）によって固定化されていくプロセスなどをあつかった。

(5) E. M. フォースター『ハワーズエンド』――都市退化論・優生学、田園都市論、リトル・イングランディズム、帝国主義。
　「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解　都市退化論と「土地に還れ」運動」、および「『ハワーズ･エンド』の文化研究的読解への不満　貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い」として発表した論文に、今後、多少の加筆を加える必要があるが、それほど時間はかからない。

(6) E. M. フォースター『モーリス』――国民の標準化、ミドル・クラス・モラリティ、セクシュアリティ、同性愛。
　「フォースター『モーリス』の文化研究　同性愛とイングリッシュネス」として発表した論文を、今後、国民の標準化という主題にそって大幅に改稿する必要がある。

(7) トマス・ハーディの戦争詩（「鼓手ホッジ」）とルパート・ブルックの戦争詩（「兵士」）、およびD. H. ロレンス「イングランド、マイ・イングランド」――帝国主義、第一次世界大戦、戦争観の変化、ナショナリズム、田園主義的イングリッシュネスの構築と脱構築。
　「帝国兵士の死」というタイトルで、今後、執筆を開始させる予定。講義原稿としてはできあがっているが、それをきちんと整理して完成させる必要がある。

(8) ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』――第四次選挙法改正、田園と都市の両義性（光の都市・闇の都市）、第一次世界大戦、戦争神経症とヒステリー、安静療法と精神分析。
　「都市を歩くこと　『ダロウェイ夫人』における文化と意志」として発表した論文に、今後、第四次選挙法改正に関連して多少の改稿を加える予定、それほど時間はかからない。

(9) ヴァージニア・ウルフ『幕間』――第二次世界大戦、世界の終末、パジェント、フェミニズム。
　「『幕間』における田園主義的イングリッシュネス　ナショナリズムと戦争」として口頭発表した論文に、今後、多少の改稿を加える予定が、ほぼ完成。

(10) イーヴリン・ウォー『回想のブライズヘッド』――第二次世界大戦、カントリー・ハウスの没落とヘリテージ化。
　まだ書きはじめてさえいないが、同じカントリー・ハウス小説というジャンルに属しているため、時間的制約のため、『日の名残り』論の一部としてそこに吸収させる方向も検討している。

(11) カズオ・イシグロ『日の名残り』――福祉国家、英国病、カントリー・ハウスの没落と解体、サッチャリズム、ヘリテージ産業・映画。
　「カズオ・イシグロ『日の名残り』　ヘリテージ文化の影のもとで」、「ヘリテージ映画の再定義にむけて――マーガレット・サッチャーの影のもとで」として本研究期間中に執筆し発表した

論文、および「カズオ・イシグロ『日の名残り』（1989）とその映画化（1993）」として口頭発表した論文をもとに、ひとつの論文として統合し、完成させる予定。

本研究期間中に完成させた『日の名残り』論の要旨は、以下のとおりである。『日の名残り』（1989）には、貴族の政治的・経済的没落、田園風景とカントリー・ハウスのヘリテージ化、大英帝国の衰退とアメリカ資本の浸透、社会主義的な福祉国家の成立などの主題が内在している。重要なのは、1950 年代前後の歴史的コンテクストに関連するものとして提示されているそれらの主題が、同時に、マーガレット・サッチャーが政権を握っていた 1980 年代の歴史的コンテクストとも深く関連しているということである。そういうものとして『日の名残り』を、ヘリテージ戦略によるナショナル・アイデンティティの強化／再構築というサッチャー政権の帝国主義的国家観と反動的歴史観を批判的に主題化している作品として解釈できる。

以上、本研究がめざす最終目標と、そこに到達するまでに解決しなければならない課題を箇条書きで示した。『嵐が丘』論や『日の名残り』論のように新たな論文を完成することができた作品もあったし、『テス』論のように大幅な書き換えを完了したものもあった。しかし『回想のブライズヘッド』論のようにまだ手つかずの作品もあれば、『モーリス』論のようにいまだ大幅な改稿を待っている作品もある。全体としてかなり進捗したと判断できるものの、まだ相当の道のりが残されているとも感じている。しかも、最終目標の達成および研究の書籍化のためには英国での新たな資料収集が必要であるが、コロナ禍のなかでそれが実現できていない。

そのため、本研究の最終年度の前年に、同じ主題のもとで新たに３年間の科研プロジェクトを申請することにした。そしてそれが認められたため、本来、４年間で行う予定だった研究をいったん３年目の時点できりあげることになった。現在、新たに認められた３年間のなかで、ジョージ・エリオットの初期作品についての論文と、D. H. ロレンスの「イングランド、マイ・イングランド」論を完成させることに全力をあげている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 丹治　愛	４．巻 97
２．論文標題 「カズオ・イシグロ『日の名残り』（一）　ヘリテージ文化の影のもとで」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	６．最初と最後の頁 pp．55-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹治　愛	４．巻 第10号
２．論文標題 『嵐が丘』と田園主義的イングリッシュネス　崇高な風景とヨーマンの記憶	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『英文学研究　支部統合号』（日本英文学会）	６．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹治　愛	４．巻 98
２．論文標題 「カズオ・イシグロ『日の名残り』（二）ーー;ヘリテージ文化の影のもとで」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	６．最初と最後の頁 pp．59-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 丹治　愛
２．発表標題 『嵐が丘』とイングリッシュネス
３．学会等名 日本英文学会第90回全国大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 丹治　愛
２．発表標題 カズオ・イシグロ『日の名残り』（1989）とその映画化（1993）
３．学会等名 日本英文学会北海道支部第66回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 高橋和久、丹治愛（共編著）	４．発行年 2020年
２．出版社 松柏社	５．総ページ数 515
３．書名 二〇世紀「英国」小説の展開	

１．著者名 篠崎実、新井潤美、宮丸裕二、松本朗、福西由美子、秋山嘉、丹治愛、安藤和弘	４．発行年 2019年
２．出版社 中央大学出版部	５．総ページ数 243
３．書名 英文学と映画	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関